

学校教育高度化センター後援事業

韓崇熙客員教授活動報告

報告者 牧野 篤（教育学研究科 教授）

実施日2012年6月25日

於 教育学部第1会議室

はじめに

1970年代初めからUNESCOやOECD等の国際機構が学習社会という概念を登場させたが、当時はスローガンあるいは理念的レベルで議論されるだけであった。例えば、1968年にハッチンス（Hutchins, 1968）が『学習社会（The Learning Society）』において文明化と人間化を志向する「学習する世界共同体」という未来ビジョンを提示し、1972年にユネスコのフォール報告書（Faure Report）が学習社会に基づいた教育改革の具体的な青写真を提案した。ところが、それまで学習社会は具体的な研究対象としての実体性を持っていなかった。つまり、学習社会は単なる象徴的ユートピアとして残されていたのである。その後、学習社会に対する関心が高まるようになった理由は様々であるが、最も大きな理由は逆説的にも全世界を揺るがした一連の資本主義の危機、例えば、1990年代初めにヨーロッパを強打した経済危機、1997年のアジアの財政危機、そして2008年のアメリカ発の世界金融危機等による労働市場構造の激変といえる。この流れの中で学習社会に関する議論は、まるで「知識社会」言説と同様に、グローバル言説へと変貌した。例えば1990年以後ヨーロッパの教育界は学習社会及び生涯学習という話題に注目し、アジアではアジア財政危機以後、次々と生涯教育と学習社会のビジョンを打ち出した。

このような状況を経て、学習社会はいまや教育学研究の新しいテーマとして位置づけられるようになってきている。韓国も例外ではなく、1990年代半ば以降学習社会や生涯学習の理念が教育政策及び研究、そして実践等においてその比重を増してい

る。例えば、教育学研究において新たな視点として学習社会、さらには学習生態系（Learning Ecosystem）という学習体制の重要性が論じられるようにもなったが、その代表的な研究者が韓崇熙教授である。韓教授には今回の滞在中、講演会を開催し、これまで韓国のみならず、欧米諸国の成人教育を研究してこられる中で構築されたご本人の学習社会論についてお話をいただいた。本報告ではその講演内容をまとめさせていただく。

概念としての学習社会

韓教授は、学習社会に対する研究なしでは生涯学習に対する研究または生涯学習システムに関する探索は不可能だとみており、その理由としては、生涯学習論を教育学の一つのアプローチ体系、とりわけ学習社会、学習生涯、そして学習システムを貫く巨視統合的理論体系の構築を志向する研究分野としてとらえるからだと述べる。その際、生涯学習研究の核心は（1）学習社会が構成する社会構造的特徴を人間学習の社会的存在方式とその歴史的発達様式に照らして探索し、（2）その中で生活する学習者たちが生涯にわたって構成する学習生活（learning life）のパターンを生涯史的観点から分析し、（3）その前提の上で新しい学習体制（learning system）としての教育構造、生涯学習制度、教育財政と政策等をデザインして構築していくところにあるという。

もちろん学習社会は、私たちが経験的に観察し、調査できる対象ではない。私たちが活用している多くの概念、例えば、知識社会、ネットワーク社会、資本主義社会等は、実際、概念的構成物であ

り、学習社会もその一つである。学習社会はそれ自体が一つの巨大言説であり、それ故、最初から経験研究の対象にはなりにくい。もしくは、理論的理解が先行する中で、それが経験的観察や調査を導く牽引車の役割を果たすといった方が正しいかもしれない。また、理論的理解も多層的な概念的構造、すなわち微視的レベルでの概念の誕生及びその連結を通じた、また異なるレベルの創発(emergence)的概念を通して可能になると思われる。学習社会をどのように研究するかという問題は、実際の社会構成様式としての学習社会の進化過程を看破できる社会科学的認識の枠組みと探求方法をどのように設定することができるかという問題と深く関わる。これに関連する核心概念と範疇、そしてそれらを経験的に把握できる研究設計と方法論が求められる。

学習生態系 (Learning Ecosystem)

学習生態系とは、「有機的で複雑系的な」レベルで再規定した学習体制 (learning system) といえる。複雑系観からみれば、学習社会は自らを特徴づける再帰的「構造」を持っている社会であり、その社会内で自己完結的に機能する学習体制の自律的要素、過程、構造を通して、学習体制自体が自己組織的に進化する。とくに、学習活動や学習生活に対する研究が学習の力動性を把握しようとする試みというならば、学習体制あるいは学習生態系は学習をめぐる起こる社会的システムの変化の諸相を追跡するための概念である。要するに、人間行為の諸相に対する研究を通して、学習が人間の生活に与える意味が何であるかを分析することではじめて、その過程で一つの社会システムとしての学習体制がどのように形成・進んでいくかを追跡し、それが他の社会システムとどのように相応し、連携するかを理解することができるということである。

つまり、生態系的観点からみれば、学習社会は小さな種から進化する一つの有機的生態系という

ことができる。すなわち、社会全般において学習体制が分節化されて進化しており、それらの「閉ざされた」固有の自己組織化的体系が発達し始める社会である。これまで未分化状態で既存の経済体制、文化体制、政治体制等の中に存在した成人教育、再教育、インフォーマル学習、経験学習等の領域が自らを区分しながら、複雑化すると同時に下位学習体制を新たに構成し、それらが既存の学校体制と接続しながら、より拡張された新しい形態の生涯学習体制へと進化する現象を見せる社会なのである。

教育学研究の新たな出発

教育学研究の歴史を振り返ってみると、過去半世紀の間、教育学は学校を越えた巨視的社会様式全般の変化及びその中で行われる学習活動あるいは学習体制の運動史を研究対象として十分に検討することができなかった。しかし、フォーマルな教育という枠内で構築された近代教育体制の分化 (differentiation) の様態はいまや知識社会を迎えることによって、脱分化 (de-differentiation) の兆しを見せており、ここに学習社会というテーマは、近代教育体制が生涯学習という新しい枠組みづくりを通して再び再分化 (re-differentiation) される契機を提供している。

教育学研究は、このような脈絡の中で新しい研究問題と対象を発見するようになる。教職学のレベルから社会科学のレベルへ成長した教育学研究は、これから人類文明の発達と社会構造化の基礎理論を形成するための準備を始めなければならない。教育学を読めば世界が読み取れる段階へと進化している。学習社会に対する理解は、このような転換のための新しい基礎を積み上げると同時に、教育学の研究方法とアプローチ方法それ自体に意味ある変化をもたらす契機を提供することができると考えられ、そのためには学習社会概念の理論的進化が何よりも緊急に求められる。